

北澤毅・間山広朗編著

## 『教師のメソドロジー：社会学的に教育実践を創るために』

北樹出版 2018年

保坂克洋（立教大学）

現在、教員養成の改革や教員の資質能力の向上がこれまで以上に求められ、「学び続けられる教員」が必要とされている。こうした認識に基づき、学校現場に対して社会学にしかできない貢献可能性があるのではないかという観点から、教師自らが社会学的に分析して実践できるようになることを目的としているのが本書である。

教員が学び続けるなかで身に付けなければならない資質能力は多様にあるが、本書で着目しているのは、「教師のメソドロジー」というタイトルが示しているように、教育実践の「方法」についてである。では、なぜ「方法」に着目するのだろうか。教育実践に限らず、あらゆる「方法（または、技術、ワザ、コツ）」は、唯一正しいものがあるわけではなく、そのためいつの時代でも切実な議論的であり続けている。また、序章において整理されているように、我々は方法をしばしば無自覚的に獲得し、実践している。そのような方法に自覚的になることで、実践の多様性を知り、選択肢が増えることにより教育実践を豊かにできる可能性が開ける。もちろん、本書で示されるのは、教育の方法に関する社会学的な知見である。そのため、マニュアルと同様に、こうした方法に関する知識を学ぶだけでは実践できるようにはならない。しかしながら、方法の多様性を知ることによって自らの実践を振り返る視点を獲得し、教育実践を創造していく手がかりを読者に与えることが本書では目指されている。

こうした問題関心のもと、本書は三部構成で展開される。第一部「小学生になるということ」では、「小学生になる」とはどのような事態であるのか、そして「子ども」を「小学生にする」際の課題はどのようなものかが論じられる。第二部の

「授業を研究する」では、教師と児童生徒がいかなる方法を用いて授業を実践、成立させているのかが示される。最後の第三部「児童に向きあう・学級に向きあう」では、低学年児童の問題行動、高学年のいじめ、外国人児童をめぐって、児童・学級に向きあう実践が示される。

本書は主に二つの視点から教育実践における方法を検討していると言える。まず一つ目は、教育実践における相互行為に着目する視点である。普段我々は、相互行為のなかで他者に特定のカテゴリーを付与したり、また、適切な相互行為の形式を用いたりしながら、他者と共在している状況を成立させている。教育実践も同様であり、教師や子どもが相互行為上何気なく用いている方法を分析的に記述することで、自らの実践を反省的に振り返り、教育実践の方法を選択可能にすることが目指されている。

二つ目は、「物語る」営為に着目する視点である。我々は、多様な印象・エピソードの中から特定のものを選択し、紡ぎ合わせることで、つまり「物語る」ことである出来事や他者を理解している。しかし、特定の「物語」に基づく理解が、場合によって、教育問題の解決を困難にしているかもしれない。そのような時に、もし現実の物語性を理解しているのであれば、現在の問題状況に関する「物語」を対象化し、新たな「物語」を立ち上げ、対応することもできるだろう。こうした、教師自らが教育実践において「物語」を戦略的に用いる視点を示してくれている。

学校教育制度が広く行き渡っている現在の日本社会において、誰もが自分の経験に基づいて教育について語るができる。時には、そうした経験則や常識的理解に基づき、教育問題が主張され、学校現場の実践が否定的にも語られる。このような中、教師に求められる専門性とは、自らの教育実践を専門的な知見に基づいて語るができるということでもあるように思われる。本書は、主に小学校段階のデータを用いて分析されているが、教育実践に関わる全ての人に、自らの実践を社会学的な視点から専門的に語る言葉を与えてくれるものとなっている。